

博士学位論文審査報告書

2013年5月30日

論文提出者 南 陽子（早稲田大学本庄高等学院非常勤講師）
論文題目 西鶴作品研究 ―表現と享受の諸問題―

審査員

主査

早稲田大学教育・総合科学学術院教授 博士（文学）早稲田大学 中嶋 隆

副査

早稲田大学 教育・総合科学学術院教授 博士（文学）早稲田大学 大津雄一
早稲田大学 教育・総合科学学術院教授 博士（人文科学）お茶の水女子大 田淵句美子
神奈川大学 経営学部教授 博士（文学）早稲田大学 広嶋 進

1. 本論文の目的と方法

本論文は井原西鶴の小説について、初期の好色物から武家物、町人物、没後に出版された遺稿集を含めた主要な作品集を考察の対象とする。従来の西鶴研究で提示されてきた作品論の問題点を踏まえながら、その表現と享受史とを視座に置いた新たな作品論を展開し、その評価の再考を図ったものである。

現在の西鶴研究は、先行作品との影響関係を検討する典拠研究と、作品の成稿過程を推定する成立論とが主流を占めている。この二つの方法論は、前者は西鶴の依拠した文献が特定できないままプロットの部分的一致が比較される点で、また後者は現存本の版面の錯誤のみを根拠にする点で、推論の蓋然性に問題があった。

また作者の創作意識を考察するにしても、伝記的資料の限られる西鶴の場合には、その推定に限界があるために、研究者の作品理解が、そのまま西鶴の創作意識に結びつけられることが多かった。加えて大正・昭和初期の自然主義文学者が自らの理想的作家像を投影した西鶴像を提示して以来、その影響下にリアリズムの観点からのみ作品が論じられる傾向がしばらく続いた。現在では、研究者が様々な西鶴像を提起しているが、多種多様な西鶴像が混在する故に、創作意識という観点からでは個々の作品の「読み」を深めることが難しい状況にある。

本論文では、こうした西鶴研究の課題を克服するうえで、個々のテキストにおける表現が、作品内部でどのような働きを担い、それを受容する読者に対して何を伝達することが意図されているのかを、作品の史的背景や他作品との関連性、物語としての作為などを広く加味しながら推定し、従来の作品解釈の読み換えを図っている。本論文がこうした方法論を採用するのは、西鶴の作品が一つの話の中に複数の話材を取り込み、多様な価値観を

取り合わせるという特徴を持つからである。

西鶴の小説を論じるのに、作者の思想性の問題や創作意図の問題に作品論を帰着させることを避け、享受の問題を見直し、作品を構成する多くの要素を総覧したうえで、作品の全体像を再構築することが、本論では試みられた。

2. 本論文の構成

本論文は、西鶴存命中に出版された作品を論じた「第一部 西鶴生前作品」と、西鶴没後に門弟の北条団水が遺稿を整理して刊行した作品を論じた「第二部 西鶴遺稿作品」との二部構成をとる。

なお、『万の文反古』について論じた第二部三章、四章は、全国の近世文学研究者のほとんどを組織する日本近世文学会の学会誌『近世文藝』94号、同97号に掲載されたものである。また西鶴作品の挿絵の受容を論じた【付論】第二章は、全国大学国語国文学会の学会誌『文学・語学』182号に、査読を経て掲載された論考である。

以下、本論文の目次を載せる。

序 西鶴研究とその作品

第一部 西鶴生前作品

[一、西鶴好色物研究]

第一章 『好色一代女』典拠利用に関する一考察

—「一代女」像の再考のために—

第一節 序章における教訓と非教訓

第二節 「仙境」への過程と『好色五人女』巻五の三

第三節 巻一の一における二人の「語り手」

第四節 悲劇と喜劇、その互換性について

第二章 『好色一代女』における「一代女」像の形象

—古典と現代、相克するイメージ—

第一節 『遊仙窟』と合奏する一代女

第二節 隠棲と俗隠者

第三節 『好色一代女』の時間と物語

第三章 『好色一代女』の挿絵と本文

—全挿絵解説と考察を通して—

第一節 『好色一代女』の挿絵

第二節 『好色一代女』挿絵総覧

第三説 『好色一代女』挿絵から見た本文と作品

第四章 『好色一代女』の受容と創造

—映画『西鶴一代女』と『好色一代女』—

第一節 溝口映画における古典受容

第二節 西鶴の「笑い」、再構成された『一代女』

第三節 近代と前近代—西鶴受容の諸相—

【付論】

第一章 『好色五人女』研究史—作品論のための序説として—

第二章 絵の時間と物語の時間

—西鶴作品における挿絵とその受容について—

第一節 版本における挿絵の位置

第二節 物語と挿絵

第三節 挿絵と読者

[二、西鶴武家物研究]

第一章 西鶴武家物における序文と作品

—『武道伝来記』の物語構造を中心に—

第一節 西鶴武家物における序文の問題

第二節 『武道伝来記』巻一の一、二の構造

第三節 敵討ちの文体、物語の文体

第二章 『武家義理物語』巻三の三における「義理」と「主命」

—「具足着てこれ見たか」の意味—

第一節 巻三の三「具足着てこれ見たか」の評価について

第二節 巻三の三における「雑言」と「不思議」

第三節 戦場と「具足」の位置

第四節 装束と象徴

第五節 武家物における序文と方法

[三、西鶴町人物研究]

第一章 西鶴町人物の文体

—ことわざの利用を中心に—

第一節 西鶴における引用の方法

第二節 ことわざの引用について

第三節 『世間胸算用』におけることわざ

第二部 西鶴遺稿作品

第一章 『西鶴置土産』における評価と作品

—西鶴研究史の中の「作者」の位置—

第一節 『西鶴置土産』における従来の評価

第二節 巻一の一「大釜の抜きのこし」における「執着」と「達観」

第三節 『西鶴置土産』代表話における「笑い」

第二章 『西鶴置土産』における「笑い」、そして「俗」

—『西鶴置土産』〈非〉代表作を中心に—

第一節 『西鶴置土産』における表現の問題

第二節	〈非〉代表作における評判記的記述の役割
第三節	『西鶴置土産』の評価と笑い
第三章	『万の文反古』B系列の矛盾と笑い
—	「書簡体小説」の趣向と効果について—
第一節	書簡体小説と近代的文学観
第二節	巻一の一「世帯の大事は正月仕舞」
第三節	「書簡体小説」という文学
第四章	『万の文反古』巻一の四における書簡と話
—	「無用に候」の意味するもの—
第一節	巻一の四「来る一九日の栄耀献立」における従来の評価
第二節	「栄耀献立」に関する問題点
第三節	「栄耀献立」と茶懐石
第四節	「無用に候」の意味するもの

後記

3. 各章の概要と論評

第一部 西鶴生前作品

[一、西鶴好色物研究]

『好色一代女』は、『徒然草』、『遊仙窟』、小町物、謡曲類を中心に、最も多く典拠探索が試みられている作品の一つである。これらの典拠研究の問題点は、多くの先行作品との断片的な言辞や設定の一致がこれまで指摘されてきたが、確定された典拠がないために、特定の作品との影響関係を掘り下げることができないことにあった。その結果、典拠を指摘することが西鶴作品の読解の深化に必ずしも結び付かないという傾向がみられた。

第一章『『好色一代女』典拠利用に関する一考察』では、『好色一代女』巻一の一「老女隠家」の一代女登場の場面を中心に、一代女を訪問する若者たちの好色庵に到るまでの描写について、『徒然草』と比較しつつ考察が行われる。

第二章『『一代女』における一代女像の形象』では、一代女と好色庵を訪れた若者たちとの合奏の場面について、原拠とされる『遊仙窟』と厳密に比較しながら考証が加えられる。

従来の典拠研究では、一代女の草庵の描写が『徒然草』『遊仙窟』における隠者像を踏まえていることが指摘されていたが、厳密に検討すると、これらの先行作品は『好色一代女』テキストと同一の言辞を持たず、設定も完全に類似するものではないと本論では主張される。『好色一代女』が踏襲しているのは、すでに類型化された隠者のイメージであり、このイメージを反復させ、さらに変化を加えることで、西鶴は中世的な隠者像を「近世的隠者」に変容させた。以上が、第一・二章の結論である。

西鶴の用いたこの方法は、同年に刊行された『好色五人女』巻五においてすでに試みられており、またその後の諸作品においても同様の隠者像は複数にわたって確認できる。「近世的隠者」としての一代女像は、『好色一代女』本編である巻一の一後半から巻六の四まで

の、一代女が過去を回想する昔語りの部分を理解するうえでも重要な役割を占めている。

『好色一代女』研究は従来、一代女の語る伝記部分の悲劇的展開を重視して読む立場と、仮名草子以来の風俗誌としての性格を重視して読む立場とに大別されるが、一代女が俗出家への揶揄と笑いを基調とする「近世的隠者」として設定されているならば、一代女の昔語りの性格もおのずと、その設定に制約されざるをえない。

第三章「『一代女』の挿絵と本文」においては『好色一代女』巻一の一後半から巻六の四に及ぶ昔語りの部分を位置付けるのに、『好色一代女』の挿絵におけるモチーフと本文との関係を総攬した。さらに、これらの風俗誌的章群と、巻一、巻二前半、巻六後半の一代女のストーリー性が際立つ章群について、仮名草子や他の西鶴作品と適宜比較しながら概略的に考察を加える。

続く第四章「『一代女』の受容と創造」は、大正・昭和初期の自然主義的解釈が投影した映画『西鶴一代女』（溝口健二監督）を考察の対象とする。溝口の『西鶴一代女』は、原作『好色一代女』を「近代劇」として意図的に読み換え、映画製作当時の観客層の嗜好を取り入れることで成立した翻案作品である。本章では、映画『西鶴一代女』の各場面に取り入れられた原作『好色一代女』各章を整理し、その選択の意図と全体の構成とを考察する。このことによって、「女の一生」として読まれてきた『好色一代女』の読解を相対化することが試みられた。

【付論】として、『好色五人女』の研究史概説と、『好色一代男』『西鶴諸国はなし』をはじめとする諸作品の挿絵を対象とした享受論を付す。

第一章「『好色五人女』研究史」は、先行研究が問題としてきた悲劇と喜劇、趣向とストーリーといった論点を、『好色五人女』作品論のための布石として、各巻ごとに整理する。

第二章「絵の時間と物語の時間」では、「時間」を表象する挿絵と、その本文における表現上の効果を検証したもので、ストーリーにおける時間の概念を、それを享受する読者の問題を視座に置いて考察する。

（問題点と評価）

本論の好色物研究は、『好色一代女』を中心に考究された。一連の論考は、作者の創作意識中心に論じられてきた読解のパラダイムを変えようという志向をもち、西鶴を論ずる視座を明確にした点では評価できる。

一方では、表現を分析する視角の恣意的側面がやや見られた。細かい点ではあるが、たとえば『好色一代女』と『遊仙窟』との関係を論ずるのに、場面や章句の厳密な一致が問題にされるが、いわゆる「遊仙窟訓」をあえて多用した『一代女』の意図的な趣向についてほとんど言及されていない。また「一代女」に「小野小町」像を見る説に対しても言及がなく、さらに『好色一代女』の研究史を、本論では「一代記的」読解と「風俗誌的」読解とに二分して把握するが、両者の相乗作用が効果をあげているという説にも全く触れられていない。

このような瑕疵も見られなくはないが、総じて明確な問題意識のもとで筆者独自の「好色物」論を展開しようとした点は、高く評価されよう。

[二、西鶴武家物研究]

西鶴の創作歴において、小説が最も多作された貞享三年から五年（元禄一）にかけて、一連のテーマで書かれた作品群に『武道伝来記』『武家義理物語』『新可笑記』等の、いわゆる武家物がある。これら武家物は、題名と序文に掲げられ「武道・義理」といったキーワードに反して、個々の作品内容が、それらとしばしば矛盾する点が主要な問題として論じられてきた。

本論文は、従来の武家物解釈が、作品を律するテーマの一貫性を重視してきたのに対し、個々の話の表現や物語性を検討することで、武家物作品の再評価を試みたものである。

第一章「西鶴武家物における序文と作品」では、序文に掲げられた「敵討」と「義理」というテーマのもつ問題点を確認したのち、『武道伝来記』巻一の一における「敵討」の描かれ方と一話全体の構成とを、文体の変化を中心に考察する。

巻一の一は、全体に占める「敵討」の描写部分が極端に少なく、テーマ性の低さが難じられてきた話であるが、表現の不統一が見られる前・後半の文体の変化と叙述量の不均衡は、作品内容に即して文体に緩急をつけ、物語上の効果を高めるという作者の創意として把握すべきである。本章は、こうした表現上の特徴に着目することで、作者の意図する話の主眼が「武道」や「義理」といった観念的テーマではなく、物語性そのものにあると、結論づける。

第二章『武家義理物語』巻三の三における「義理」と「主命」では、従来は劣作とみなされてきた『武家義理物語』巻三の三を題材として、作品内容と序文との齟齬の問題を検討したものである。

巻三の三は、話の主要人物である「中小姓」が雑言を理由に朋輩を討つという筋立てが『武家義理』序文と矛盾すると指摘されているが、本章では、話中で使われる「具足」の文脈上の意味を歴史的観点と文芸的観点から検討し直すことで、序文に矛盾するとされる「義理」の意味の再定義を図る。

「西鶴の創作意識」を基軸とした作品分析は、物語としての作品解釈に大きな制約を加えてきた。西鶴武家物研究では、今後、表現面を含めた作品内容における広い物語性の探求が求められると、本論文は指摘する。

(問題点と評価)

本論文の「武家物」研究は、作者の意図するテーマを軸にした作品論ではなく、表現や「物語性」に鑑賞軸を移したことが特徴となっている。本論文では「西鶴の武家物は、武士としての正しさ、倫理性、思想性を説くテキストではなく、『虚構としての物語』を読者に対して提示するテキストである」と述べられるが、このような立場から従来の研究を批判する論旨には妥当性が認められるものの、肝腎の「虚構としての物語」としての分析が具体性を欠きらいがある。さらに、研究史で問題にされていた武家物の読者についても触れられていない。混沌とした現在の研究状況があるので、あえてこの問題を避けたのかもしれないが、享受論を視座にした本論文では言及されるべきだったと思われる。

以上の点を勘案しても、鑑賞軸の転換をはかったという点では高く評価できる。

[三、西鶴町人物研究]

西鶴の小説において、表現面での最も大きな課題は「俳諧的文体」の理解である。俳諧的散文の第一の例は『好色一代男』を筆頭とする好色物の作品群であるが、雅文脈を多く取り込んだ初期の好色物に対し、中期から晩年に刊行された『日本永代蔵』『世間胸算用』の町人物は、俗文脈を取り込むという点で、他の作品に比べてより高い俳諧性が確認される。

第一章「西鶴町人物の文体」では、俳文脈の顕著な例として、西鶴町人物の文中における「ことわざ表現」の引用の方法を考察する。西鶴に先行する仮名草子類では、ことわざは成句の形のまま引用され、話に教訓性を加味するという役割を担っている。一方で西鶴の町人物における「ことわざ」の使われ方には、成句であることわざの一部がもじられ、作品中の文脈に応じてその慣用的意味を変化させるという引用方法が多く指摘できる。西鶴作品における引用の方法が作品内容に及ぼす作用は、雅文脈、俗文脈の別を問わず、内容理解のうえで大きな意義を持つ。

(問題点と評価)

本論文の「町人物研究」では、諺の引用方法を「俳文脈」として位置づける。諺は貞門俳諧以来、連句付合の一技法として重視されたが、諺の引用だけをもって「俳文性」を論ずるにはやや無理がある。が、西鶴の現実認識や成立論中心に展開してきた町人物研究に、叙述面から一石を投じようとした本論の意欲は評価されるべきであろう。

第二部 西鶴遺稿作品

西鶴没後に刊行された遺稿作品は、版面の乱れ、文章の不整合など諸々の問題を含むことから、草稿の成立過程を考証する「成立論」が研究の主流をなしてきた。なかでも第一遺稿集である『西鶴置土産』は、北条団水の編集をめぐる混乱と作品集全体のテーマ性の希薄さが問題とされ、団水をはじめとする弟子の関与を如何に把握するかという点で、議論の紛糾してきた作品集である。

第一章『西鶴置土産』における評価と作品』においては、「枯淡」「達観の境地」などと形容されてきた従来の評価が、明治時代後期から昭和初期にかけて形成された自然主義文学者による評論を基に形成され、かつ『西鶴置土産』の代表話とされてきた巻一の一、巻二の二など数話の解釈によって成立していることを指摘する。従来の解釈が、話全体を把握するのではなく、没落した大臣の愁嘆など、話の断片的な要素を拡大して解釈する傾向にあった点に疑義を呈し、『西鶴置土産』の「笑い」の側面に改めて着目する。

第二章『西鶴置土産』における「笑い」、そして「俗」では、これまで論じられることの少なかった『西鶴置土産』の非代表作を取り上げ、その表現と内容に遊女評判記との類似性が見られることを指摘する。

『西鶴置土産』の「笑い」の問題は、長く「成立論」が主要な課題とされ、作品内容の議論が等閑視されてきたきらいのある『万の文反古』の解釈にも、同じように指摘することができる。

『万の文反古』のB系列（谷脇理史論文）は、書簡という形式を採ることで、手紙の書

書き手が自らの苦悩を告白した秀作として高く評価されてきた章群である。

第三章『『万の文反古』B系列の矛盾と笑い』は、こうした従来の見解が近代の書簡体小説の意義に照応させた解釈だと批判する観点から、巻一の一「世帯の大事は正月仕舞」を取り上げる。『文反古』全般に使われる「尽くし」の趣向は、書き手の人物像や書簡の内容を具体化するための重要な表現であり、本話でも用いられている。書き手の人物像が、従来の解釈とは対照的に「笑い」の対象として読者に提示されている点を主に考察する。

さらに、同様の傾向は『文反古』巻五の三「お恨みを伝へまいらせ候」、巻一の三「百三十里の所を拾ふの無心」といった、『文反古』のB系列を代表する他の話にも共通して指摘できることを論じる。

第四章『『万の文反古』巻一の四における書簡と話』では、巻一の四「来る十九日の栄耀献立」の料理献立部分の記述に考証を加える。この話が従来考えられてきたような、書簡の書き手が接待の場に豪勢な献立を用意させるよう強要する内容ではなく、反対に、簡素な内容へと改めるための指示が下された、茶懐石の献立であると結論付ける。

この茶懐石の献立は、巻一の四の書簡全体の中で、豪勢な接待を拒否しようとする書簡の書き手の意図を示すものであり、料理献立以外の書簡中の記述にも、このメッセージは一貫して含意されている。

さらに本章では、書き手が接待を拒否する理由を、巻一の四評文と当時の経済状況などを考証したうえで、書き手側が受取り手への資金融資を断るためと推定する。書き手側は豪勢な接待の提案を却下することで、融資の申し出を暗に断りながら、同時にあるべき商人の姿を訓示している。従来、事務的な用件を羅列した文面として読まれ、文学的趣向の乏しい話とされてきた巻一の四の書簡は、書き手と受取り手の間に交わされた、商売の駆け引きと、それに伴う人心の機微を描いた話として成立している。

さらに本論文では、遺稿集研究の問題点を、以下のように指摘する。

西鶴の遺稿集研究は、成立論に関する議論が活発に行われてきた一方で、作品内容の理解という点では考究が最も立ち遅れていた。それは作品を鑑賞・分析するとき、研究者の想定した「西鶴」像にかなう要素のみが作品から取捨選択されて解釈されてきたためであった。遺稿作品における「笑い」の要素が長く等閑視されてきたのは、『西鶴置土産』や『万の文反古』が、西鶴の到達した「晩年の境地」を体現する作品集として位置づけられてきたことと無関係ではない。西鶴研究は「西鶴の創作意識」を基軸として作品内容を理解する従来の方法から、個々の作品内容の表現面を吟味し、話の文脈を汲みながら立論される作品論の方法へと移行されなければならない。

(問題点と評価)

遺稿集の内容面での研究は、近時盛んであるが、本論文ではとりわけ『万の文反古』数章の解釈と評価とを転換させる意欲的論考があったことは、きわめて高い評価が与えられよう。今までほとんど問題にされなかった叙述を、資料を博搜して解釈を変えた点は、研究の王道ともいえる。書簡の書き手と受取り手との微妙な関係を視野においた解釈は、『万の文反古』読解の新しい地平を感じさせる。

ただ、一話ごとの解釈が、作品集全体の鑑賞軸を転換する視座になりえているかという

点ではまだ考察の余地が残る。この点についての今一層の追求が必要となろう。

4. 総評

本論文の特徴は、西鶴の認識や創作意図といった作者コードの読解を、表現軸に転換し、さらに、テキスト分析についても、典拠論や草稿成立過程を論ずる研究方法を批判した点にある。研究者による多様な西鶴像の提示や、典拠論・成立論の乱立が、西鶴研究を混乱させている現在の状況を勘案すれば、一貫した本論文の研究的立場は高く評価される。

西鶴作品は、研究者（読者）の理想的作者像を作品に読み取るという、作者・読者コードをすり替えた方法によって解釈されてきた伝統がある。すなわち田山花袋や正宗白鳥は自然主義文学者のごとき西鶴を作品から読み取り、織田作之助は大坂人西鶴に共感した。

本論文は、そのような読解からの転換を試みている。その特徴がよく表れているのは『万の文反古』を中心とした西鶴遺稿集の研究（第二部）である。作品の叙述を詳細な考証によって検討して、評価軸の転換に成功した。このようなテキストそのものに立脚した読解の深化こそが、研究の現状を打破することにつながろう。

第一部では、『好色一代女』のテキスト分析に紙幅が割かれた。好色物研究の（問題点と評価）欄で述べたように細かい点で論じたりないところもあるが、映画『西鶴一代女』まで視野に置いた独特の論旨展開には斬新さを感じられる。

武家物研究においても、看過されてきた叙述から読解のパラダイムを転換した。町人物研究では、俳文概念の考察にやや不十分な点があるものの、諺を取り込んだ叙述に着目したことは評価される。

短編小説作家である西鶴を総体的に論ずるのは難しい点がある。にもかかわらず、小説の表現にかかわる様々な要素から、果敢に作品分析を試みた本論は、「博士（学術）」学位を授与するにふさわしいとの結論に、審査員一同が達したことを、ここに報告する。